美容師養成教育における実践教育授業案の構築に向けて

冨金原　光　秀

Toward the Construction of the Hairdresser Training Education in Practice Education Teaching Ideas

FUKINBARA Mitsuhide

キーワード：美容実習、美容実践教育授業案、美容カリキュラム

はじめに

現代社会の特徴は社会の多様性とその相対性にあるといえる。リテラシー教育にいわれているように、われわれは多量な情報や変化のスピードに対して柔軟な視点で捉え、多様性を享受する社会構造や、新たな状況に対して判断できる対応力が求められている。これらを踏まえながら、職業や生活に主体的に関わっていくための美容師養成施設におけるカリキュラム授業計画の実践的教育システムを提示していく。それは美容学校教育と美容業の現状を踏まえて実践的課題を提起し明文化していくと同時に、美容教育の独自性を形作っていく事でもある。筆者は論文「美容実習における学習指導とその効果について」で美容を職業として自立した人格を形成していく為の４条件として①美容の基礎的技術、②創造力・表現力、③情報収集能力、③コミュニケーション能力、の総合的な習得が美容教育における必須の事項であり、結果としてこれらの４項目が、相互に連なり循環構造となっている[1]ことを明らかにしてきた。現在の美容教育ではこの４つの柱の関係性は美容師養成教育のカリキュラムに明確にコミットしてきていないのが現状である。その認識に立った上でこれら４つの柱をたたき台として美容の実践教育授業案を構築していく。この案を考察するにあたり、学習者相互の中で新しい価値を創出し、学習者自身がより能動的で、創造的な学びを実現する教授方法を考察していき、さらには学習者が個人的なプロジェクトと平行して他の学習者と協力して取り組める学習システムを構成することが望ましい。そして教科の具体的な目標を確認できるよう明確にしていくことはいうまでもない。それらを踏まえ美容業の専門性を重視した現場的なまなざしを持ちながら、学生の視点や身体からも意図的に考え捉え直し、今後の美容実践教育カリキュラムの基盤になるものとしていく。その中で本論で述べていく授業案の具体的な課題の一つとして美容専門領域（実習）と美容教養教育（理論）の二つの枠を統合した教育理念を示すことを目標においていく。美容教育の現状では、古典的な学問体系が数少ないこともあり、演繹的な構成に限界があると考え、さまざまな個々の具体的な実践から思考していきながら、理論を構築していく帰納的なカリキュラムに比重をおいた構成が適切ではないかと考えているからである。帰納的な構成を前提とした場合には多様な価値の相対性を考慮に入れ、数多くの評価や評点も学生に用意し、客観性や適切性を確保することも必要となってくる。この一見２項対立的な課題は美容師養成教育に限らず、さまざまな教育現場が抱える現代的課題となっており、この課題に積極的に取り組みながら、美容業の実践事例の検討を通してその背景にある

理論的理解や、問題解決に至っていく授業案構成としていく。つまり、従来型の美容の理論に関する科目と美容の実習科目を相関的に捉え、より現場対応的で実践性の高いシステムとしていく。この美容実践教育カリキュラムによって、社会の要請に対応していく複眼的視点を備え、高度な美容の専門性を有する人材を送り出していくことを射程においていく。

まずカリキュラム構造の中軸として【目標設定→省察→記録→結果】といった一連のサイクルを授業案の中に通低させ、反省的・批判的に考察する能力を盛り込み、言語的な解釈の獲得を踏まえ、論理的に伝える意味生成を考慮した授業案としていく。まずはこれらのメソッドを想定していきながら理念的考察をし、その後具体的な美容実践授業案を提示していく。

「反省」という概念考察

筆者は現在の学生状況を鑑みると、省みることの希薄さを教育現場において実感している。反省という概念についてはさまざまな学者や哲学者においてすでに語られてきた。本論で提示する省察とは、自己の行為を自発的に統制、組織化していく際の概念を主としていく。G. H ミードによればこれらを「一般化された他者」の価値観や態度として反省的知性としている。そして更にミードは「パーソナリティの組織化」「組織化されたパーソナリティ」[2] と表現し、実存するパーソナリティは社会的相互作用を通じて形成されるとして、人格形成に反省的態度を取り入れた。この相互の関係性を前提としつつ発展していく認識は、リードをはじめデューイのプラグマティズムの教育論で示され、社会的相互作用という経験を基底としていると考えられる。佐藤学によれば『学び合う共同体』の中で「そのために一人ひとりの多様な個性を出発点とする活動的な学習とその多様な学習の交歓を実現する協同的な学習を教室に保障し、そこで展開される学習が学校の内外の多様な文化的・実践的共同体との連帯を築きあげる方向で促進される必要がある」[3] としている。佐伯胖においても、理論と実践の関係を問い直す文脈において、「教育実践」を中心に据えて「個人と社会とをどこまでも相互構成的な概念とみなすならば、個人のさまざまな個別性も新しい社会的実践の中で多様に定義しなおせるもの」[4] としている。つまり授業を通して学習過程や結果に至るまでが絶えず問い直され相互作用の中で発展し変容していくとしている。なるほど確かに作品を制作する過程でイメージ通りにことが進んでいくことは極めてまれであり、「反省」を通して、当初の方針の大転換を迫られたり、予期できない展開が多々ある。そして結果的に作品自体が思いもよらない方向に至り完成することがある。目標設定どおりの作品でない別の新たな作品ができたりする。これらは、いわば「創り変え＝変容」が反省を通じた過程の中で起こる発展のプロセスであると考えてよいのではないだろうか。このことについては筆者の論文「美容実習における学習指導とその効果について」において精神的、感覚的な変容が物事の視点や考え方の創造力の原動力となっていることを既に指摘した。

そして筆者の上記論文の１番目の項目事項として美容の基礎的技術において反復継続することの重要性を説明し、手から手へ受け継がれてきた基礎的技術のエッセンシャルを美容活動の原点・出発点とし、創造力という概念を軸にして、表現者として確立していくプロセスを踏んでいくことを述べてきた。美容業・社会生活上に要求される能力を「美容の基礎的学力」あるいは「美容コンピテンス」として具体的に定義していき、実習による技術習得や制作のプロセスにおいて反復練習の中で培っていく創造性への支援が美容実践教育に組み込む。そして何よりも実技に裏打ちされた実感があることは自律や自覚を内包した自己理解を促す。それは高い公益性や倫理性を保持することと無縁ではない。時代の変化に合わせて積極的に社会を生き、専攻分野についての専門性を獲得するに至る。その中で「反省」という概念をカリキュラムの中軸としていく意義は、反復練習の過程

や、創造を表現する過程、その他、人とのコミュニケーションの過程においてよりよい状態を求めて、ものの見方・考え方の変更をしていく創造的態度の根本的な内的活動の一つとして省みることが内在し、たえず新たな気づきをもたらすことにある。

ジャン・ナベールによる「反省」

『岩波　哲学・思想辞典』によればもともと「反省」とは光学の用語であり、プラトンの光のメタファーとして思惟の働きが対象を照らすという意味がある。さらに光が鏡に自己を照らすという鏡とメタファーとを重ねることで、知性が反転して自己に向かう作用とされる。ちなみに美容業は鏡を前に美的活動を行う職業である。越門勝彦によれば、『省みることの哲学―ジャン・ナベール研究』において、「われわれの意識は、どのような決断、行動、作品であれ、最初はそれを直接的所与として経験する。そこに反省の入り込む余地はない。だがわれわれはその状態に留まることなく、自己にとってのその所与の意味を理解しようとする。この行動で私は何を実現しようとしたのか、この行動は私にとってどのような意味をもつのかと考えることが反省という営みである」[5]としている。ジャン・ナベールはカントの反省哲学を発展させた人物である。さらにナベールは反省とは、なされた決断や行動の回顧を通して自分が根本的なところで何を願い、何を実現しようとしていたのか、そして何を実現し何を実現出来なかったかを問うことであり、それは結果として自己理解の深化をもたらすと考えている。こうした反省は、決断や行動を媒介とした間接的で非直感的性格をその本質としてもつものであり、そうした決断や行動あるいはその結果生じた「作品等」は、いわば記号として扱われその読解を通して、原因としての作用の意味を理解するとナベールは述べている。つまり反省が介在しなければ、行動それ自体は過去の出来事でしかなく、作品それ自体は物体でしかない。反省行為は行動の主体、作品を制作した主体の意識を志向する。この解釈はそのまま美容教育における創造力にあてはめられると考えられる。そして越門は、「反省が創造の諸様態を解明する」[6]としている。このように反省という心的過程は、創造力にとって重要な要素となりうる。このことは筆者の論文「美容実習における学習指導とその効果について」において述べてきたことと整合を図れるものである。この反省がもたらす創造力や表現力をカリキュラム作成の中に通低させていくことをねらいとする。

そこで、「反省」を喚起させる具体的な授業案の内容を作成することが美容教育や現場での実践の中で経験する自己教育力の基となるものに他ならないと筆者は考えている。小澤基弘によれば、反省を喚起させる方法論としてまず１番目に「その指導の具体的な手立てとして各自で思考して作り上げる課題を与えることや、自身と向き合う視点をもたせ、習慣化できれば望ましい」としている。また２番目として「制作の過程を重視する過去の自身の作品等を比較検討し、レポートにまとめたり、話し合える場をもつ。」そして３番目に「各課題に対して責任を負わせるシステムを作る」[7]などが考えられるとしている。美容実践教育における反省は個人に留まらず、公共性・共同性・正当性も踏まえた社会的反省力を射程におくもので、相互作用を踏まえた反省はその効果とともに自身に戻り、結果として創造力や表現力、そして自己の成長を促すと考えられる。経験の中で創られ、創りかえられていく可変的な過程の中で主体性は段階的に確立されていく。そして連続的な省察・記録の積み重ねにより身体に蓄積させていく。

「記録」について

記録とは自己を省みることを促すツールであり、またプレゼンテーションの際のツールとなり、そして個人の技術成長過程を残すものであり、有効なコミュニケーションの手段となる。教育課題の現状では、教育活動の成果を数量的に評価することが昨今求められている。そういった状況にも記

録する行為は不可避であり、学習成果と絡みながら、学習者自身が自己の学習成果到達までの過程を設計し記録していく、いわば学習ポートフォリオという考え方が重要となってきている。

学習者がどのような動機や目標をもって学習に参加しているのかをふまえて授業力を自律的に改善させていくメカニズムをいかに構築していくかといった実践的な問題は、学習過程そのもの、あるいは学習の成果を計測する事が課題となる。【目標設定→省察→記録→結果】の評価といったサイクルを通して、学習者の多様性を前提として学習ポートフォリオという考え方を用いながら、過程と成果を段階的に記録していく。自身の調べたことや作品などの過程を記録する学習ワークブックを活用する。先ほど述べたようにこのワークブックによる記録の目的のひとつは結果的に反省体験と批判的思考を奨励することにある。創造の過程を個人的に記録することで自己を熟考する手立ての一つとなり、後述するプレゼンテーションの際に生きた文脈や、詳細な対話を生むことにもつながる。記録する行為は社会において個人的にも組織的にも実践的な行為そのものであり、プロジェクト能力などを発揮する為の準備にもなりうる。それらを踏まえ、授業案に組み込む学習ワークブックには以下を含むこととする。

1　技術や作品の段階的な成長過程（撮影等による）

2　作品など創造過程の記録（制作過程の撮影や記述）

3　作品のテーマと分析（他者との対話材料とする）

そして記録としてのもうひとつの有効性は学習の可視化をしていくことである。例えばヘアショーをワークブックやドキュメンテーションとして詳細に記録する。具体的なコンテクスト（文脈、場面、状況）の中で行われる行為の変化をとおして、反省的に振り返り、客観視していく学習デザインと成りうる。そしてコミュニケーションや省察の機会ともなる。ビデオカメラ等によるドキュメンテーション化においては、個人的な軌跡の記述だけでなく、複数の他者との流れが記述できるので、グループ単位での思考と行為の軌跡ともなりうる。基礎的技術（カット・オールウェーブ・ワインディング等）の段階的な記録としても役立ち、省察などにフィードバックされる。

思い通りに至らず変更をしたり、試行錯誤の過程の記録、そしてその結果としての完成をどう判断したかという問題は、美容実践教育において一連性をもった留意すべき事項である。それでは目標設定→省察→記録→結果の一連の流れを踏まえ、具体的に実践的授業案を提示していくこととする。

美容実践教育授業案

	カリキュラム別	授業科目	単位[8]	時期
美容実習科目	美容師試験 必修（選択）課目	国家試験課題等基礎的技術		随時
	サロン実践実習	パーソナルスタイル演習		適宜
		展開図理論・分析		適宜
		カウンセリング実習		適宜
	創作美容実習	作品制作		適宜
		プレゼンテーション発表		適宜
		ヘアショー		適宜
		美容コラージュ制作		適宜
美容理論科目	美容師試験 必修（選択）課目	国家試験科目等		随時
	美容実践教育理論	パーソナルヘア・カラー理論		適宜
		プレゼンテーション演習		適宜
	芸術表現科目	空間表現（照明・展示・舞台演出）		適宜
		芸術鑑賞学		適宜
		作家研究		適宜

①パーソナルヘアスタイル演習

パーソナルヘアスタイルを習得していくプロジェクトの授業を組み込んでいく。これは筆者の論文「パーソナルカラーをベースにしたヘアメイク理論についての考察」[9] で示した、パーソナルヘアカラー理論のガイドラインに基づき取り組んでいく。その内容としては、パーソナルヘアカラー創作として

1　パーソナルヘアカラースタイル特徴（カテゴリー選択についての情報等）
2　特定のトピックについてのレジュメ
3　テクニックやストラテジーの理解（実践と理論の具現化）
4　色彩構成について
5　作品制作についての振り返り（発想・構想から表現に至る論理的思考）
6　反省箇所、解決策など
7　作品に対する自己評価

これらは必然的に他者と共有を図る目的でもあるので、コミュニケーション活動を関連付けていく。内容的に教室の学習を越えていく美容の実践的学習となっている。パーソナルヘアスタイルの授業として以下のことをシラバスに組み込んでいく。

1　学習した美容の基礎的技術に特有のスキルを応用して主題や発想、構成を具体化する。

2　自分の肌の基本色を作らせてその基本色に赤・黄・青を加えて3種にし、それぞれ明暗の5段階、合計15色作り、デッサンに着彩し、分析・検証をしていく。

3　共通主題例：春夏秋冬等の主題を決めさせ、5分割した25の正方形を4つ用意し、その主題を表す色彩構成をする。結果として「赤」にも言語によって「元気な赤」「深みのある赤」から「青みの赤」「黄みの赤」「明度や彩度によるそれぞれの赤」が見分けられるよう、色彩感覚を豊かにしていく。

4　ドミナント色彩構成学習で美しい色の組み合わせで何がどう美しいのか迷ってしまう学生をサポートする理論が展開できる。ヘアスタイルや色彩あるいは明暗やバランスといった基礎的造形・色彩要素に加え、現実のトータルスタイリングには空間や素材（マティエール）が重要な要素となることを習得する。ゆえに美容教育を高度化していく際にこの知的理解のウェートは大きい。

5　作品を正式な作品展・フォトコンテスト等に出品する。

（このことは動機付けと意欲を学生に促すものであり、積極的に公式な場へ作品を提示し、社会的評価を求めていく。）

以上を踏まえてパーソナルヘア・カラー授業をシラバス化していく。冒頭でミードは「パーソナリティの組織化」「組織化されたパーソナリティ」と表現し、実存するパーソナリティは社会的相互作用を通じて形成されると述べたが、パーソナルヘア・カラーの授業内容も同様であり、個別に対応したヘアスタイル・メイクアップ・カラーリング等を提唱していきながら、結果としてコモンセンスを習熟させるところにその特徴をもつものである。

②展開図演習

展開図を授業に盛り込むことで論理的思考能力を身につける。美容業を空間芸術と捉えてみると、美容教育の造形要素として「空間」という概念を基にして構成をしていくことが重要となる。カット技術やカラーリング（色彩）における空間構成学として展開図に着目する。具体的にはカットで切り終えたウィックにプラスティックまたは針金等のスティックをさしてカットの展開図を授業で行う。これはサロンなどの実践現場において必須の知識であり、論理的思考と構成能力、及び空間認知能力に関わるもので、重要な課題である。この課題は現在の美容学校においてその必要性が認識されているにも関わらず、ほとんど取り上げら

れていないのが現状である。展開図の授業計画については今後、具体的な詳細を明確にし、その体系化に向けた授業研究を行っていく必要がある。

③プレゼンテーション

プレゼンテーションの授業については筆者の論文「美容実習における学習指導とその効果について」においてその学習の構造と有効性について述べた。プレゼンテーション授業には、自らの実感でしか語れない生きた文脈を記述するよう心がける。それは自己を深める自己分析や自己理解を前提とした他者理解を想定している。具体的にはウィックなどを使用して制作した自身の作品等について深く考察して紹介したり、また美容や芸術をテーマとした作家等の研究を行い、資料や文献での考察や美術館の鑑賞などでのリサーチを行い発表していく。自ら制作した作品については、どう反省し作品を制作したのか、そして何に気づいたのか等をレジュメとともに口頭で発表する。学生が自身の考えと気持ちを探り伝える機会をもつことは重要である。自己表現を積極的に行い、他者の意見など多様な考えや作品を通して柔軟な思考と寛容さを身につける。この思考力は複雑で流動的な現代社会において有用な力になりうる。佐藤は、「高度化し複雑化し流動化する知識社会における基礎教養の教育の新たな再定義が必要で、それはつまる所批判的で反省的な思考力とコミュニケーション能力の再定義に他ならない。」[10] としている。それによって多様な文脈における複雑さや矛盾や曖昧さを内包し、寛容な態度を育み、作品への理解をより論理的にまとめていくことができると期待できる。前述したようにプレゼンテーション学習の具体的な取り組みについては作品等についてのプレゼンテーションや鑑賞等によるプレゼンテーションを行っていく。その際に以下の項目を前提に据える。

1　個人のプレゼンテーションのみならず、グループ討論による意見交換とフィードバックを受け入れ今後の創造的活動の糧とする。
2　学生が受身で授業を受けるだけでなく、参加型にしていくことが望ましい。これにより自主性を引き出しながら自ら考える力を身につけていく。
3　あるテーマについての本質と機能を知ろうとする実直な姿勢が必要であり、それは、テーマの深い考察と実際の事象の分析を行い、学習し詳細を記述する。
4　鑑賞行為は、鑑賞者自身が意味を生成していく学習を主としている。鑑賞での思考を言語として記述し、作品のさまざまな要素を外在化したものを基に自己分析し、自身の特性を知り、結果的に他者理解へと至る授業形態の意義は大きいと考える。

そしてこれらを踏まえプレゼンテーションノートを作成する。リサーチを行い記録し、発表の際のレジュメとしていく。次の資料は作品発表の際のプレゼンテーション用ノートのモデルを作成したものである。

④ヘアショー

ヘアショーなどの舞台芸術をプログラムとして積極的にとりいれる。つまり創作美容授業の実習で作品を制作し、発表の場としてヘアショーを行っていく。全体的創造体験をすることにより、個や共同体の中での葛藤を通じ、達成感を学習する機会となる。その際に創造的過程と熟考も重視する。ヘアショーは相互依存的性格が強く協働作業を必要とし、意欲的な姿勢が問われるものである。そのヘアショーによる教育効果には、

1　自他の創造性に対する好奇心や関心、喜びを体験
2　創作過程を探求→記録（自己モニタリングによる省察の機会）
3　舞台ヘアメイクスキルを身につける
4　ショーのプロセスにおいて自身の考えや発想を伝える
5　自他の作品や作家の作品を鑑賞し、記録

プレゼンテーションノートNO1

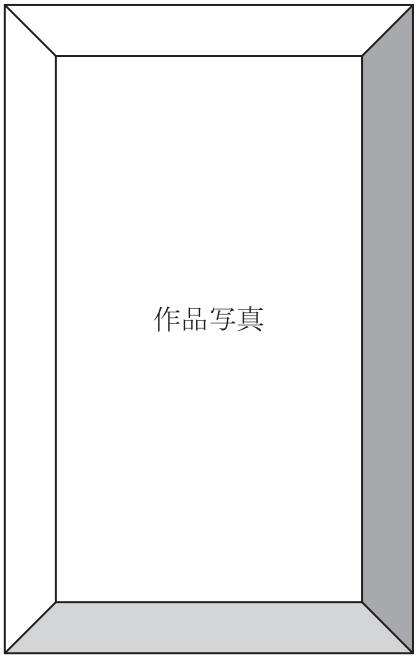
制作作品

テーマ：

技　法：

材　料：

色　彩：



解説（表現法）

制作過程について

プレゼンテーションノートNO2

反省点

発表した際の他者の意見（今後取り入れたいこと）

変更点・改善すべき点

自己総合評価

⑤美容コラージュ制作

フォトコラージュ、その他ウィッグを使用した美容コラージュ作品を制作する。フォトコラージュは糊とはさみを使用した作業であり、複数の写真や切り抜きを並べて貼り付ける為、そこに表現されるのは物理的に複数の視点から見られたものである。コラージュは美術表現の上手、下手の基準から開放し、誰にでも幅広く制作を行える点が利点として挙げられる。そこに集まった写真等は、自然と時間の概念を含みもつ。現代において、私たちのまわりに氾濫する客観的な映像としての写真や切り抜きを使用し、見ることの学習の中で、疑問や考えを提示していくフォトコラージュ表現は、空間認識をそのまま捉えなおす作業でもあり、それを行っていくことで、造形能力と表現力、創造力、コミュニケーション能力にまで広がる知識を獲得するに至り、美容業にとって可能性を有したものとなる。そして心理的側面を併せ持つコラージュは、作品を比較、考察することにより、学生の心理的状況把握ができる。

⑥フィールドワーク

特別授業としてフィールドワークを実践授業に組み込む。美容師養成教育にフィールドワーク（実践現場）という観点は重要となる。それは表現活動であり、鑑賞の記録でもある。教室での学習を超えて現代社会に主体的に参加し関わっていくための重要な教育的観点を提供するものである。ポートフォリオや実習授業にフィールドワークを取り込みそれをベースとした演習科目をカリキュラムの授業内に位置づける。実践研究や実践観察は養成教育に必須である。例としてブルデューのフィールドワーク実践の経緯について取り上げる。

ブルデューの「実践」と「反省」

ブルデューは、レヴィ＝ストロースのように実践を説明する構造主義の理論モデルのみならず、経験の優位を掲げるメルロ＝ポンティの現象学などの理論的教養とともに、彼自身の実践的なフィールドワークから引き出された直感の確かさと限界を反省的に研究した実践家である。彼にとって自分の分身を抑圧するよう促したものすべてが、反省の対象となっている。何よりもまず引き裂かれた自分の経験に向けられ、自己の反省性に基づく実践経験が彼にとっての中心課題であった。彼はその反省的経験の中から自分の経験を客観化することで、その理論的重要性がはっきりと自覚化されると説明している。実践的関係を自己と他者の媒介項とすることで他者をもう一人の自分として構成している。そしてブルデューによれば、目標を追求する過程において葛藤や対立、喜びなどさまざまな状況に直面し、その状況に適切に対処していくための心的・身体的な性向があるとしている[11)]。その新たな方法や手法は創造力となり自己の再構成や再創造がなされていくと考えられる。このように自己変容を促すフィールドワークは作品などの制作力や状況判断能力など、実践教育的な面においてその意義は大きいといえる。

ブルデューの実践研究に習い、フィールドワークにより個々がその実践的反省の中で体験を俯瞰し、理論を構築する過程と結果を探る。美容教育のフィールドワーク授業実践に向けた授業研究の焦点として、

1　授業分析と方法
2　実践省察の方法
3　個々の学習サポート
4　社会との対応
5　危機管理等

が考えられる。この研究を通じフィールドワークの特性である「経験と習得」という点を活かし、学習意欲向上だけでなく、コミュニケーション力、創造力の要素を誘発し、学習者が自らの潜在的な能力に気づき、活用していくことができるようになると期待できる。

美容福祉教育の意義と展望

美容教育によるフィールドワークの大きな柱の一つとして美容福祉を組み込むことは、現在そ

して今後の社会状況を踏まえ取り組むべき重要課題と位置づけていく必要がある。特別養護老人ホーム等による介護実習は典型的取り組みの１つである。この現場での授業実践はそのほとんどを委託の形態で行っているため、学校と福祉施設両者の連携を密にとっていく必要があり、関係性を保つことが求められる。美容の技術を施設の方々にサービスとして提供することが主ではあるが、専門分野でない場所へ訪問することになるため、学内での事前の準備や学生へのインフォーマルな話し合いの場や実習教育を踏まえた時間の確保が必要となる。具体的な例として対象者（高齢者）をどのように捉えるのかを考察していったり、事前指導においてどこまで福祉現場の詳細を伝えていけばいいのか不明確な面が多分に考えられるので、指導範囲のベースラインを明確化することが課題となる。実際の美容施術内容は学生が対象者に対してメイクやネイル、マッサージのサービスなど美容学生が参加出来る事を行っていく。学生自身に目上の人への敬いや気づきを与えていくきっかけともなるのでその意義は大きいといえる。このように福祉現場での学習は学生にとって社会的文化的態度や心のあり方など、さまざまな社会階層のひとや生活様式に触れるという直接的な経験を通して社会に対する認識を高める手がかりとなる。美容教育においても福祉と社会の持続的な発展に必要な人材育成は今後において重要なファクターとして教育の理念となりうる。今後美容福祉や美容介護の分野は、現況を踏まえ益々その需要とともにさまざまなフィールドワークを準備すると考えられる。その実践経験の積み重ねによって学生ひとりひとりが社会に必要とされている新たな美容分野を理解し、いかに社会貢献できるかを考える機会を提供していく場となる。このように社会貢献を今後の教育において使命のひとつと捉えれば地域貢献などを含み産学連携を踏まえ、企業や介護福祉業界との共同授業やインターンシップ制度の活用も期待できる。

おわりに

今回の美容の実践教育授業案において残された大きな課題として、１つ目に体系的な教育カリキュラム作成の中に、教育の質を保証する評点・評価システムの構築をしていく必要がある。それは教育現場において授業体系の再構築や再編成が迫られる現状と、また学校側が社会的にアカウンタビリティ（説明責任）を果たす必要性が高まっていることと無関係ではない。その結果としての評価システムを具体的に提案していくことである。そして２つ目に授業科目の具体的なシラバス作成に向けて「なぜこの教科を教えるのか、どのような力を学習者につけさせたいのか」という基本的な問いに具体的に答え、「何を学習したのか」の延長線上にそれらが、現場においてどのように実践されたか、どのように活かされたかを検証していくことである。学習者の自発的な学習活動により、卒業後に続く知的活動の基盤を作ることの時間的・空間的なひろがりを踏まえて今後も引き続き美容実践教育カリキュラム研究を行っていく。

註

1）冨金原光秀「美容実習における学習指導とその効果について」『小池学園研究紀要』第７号、2010
2）ハーバート・ミード『精神・自我・社会』（稲葉三千男他訳）、青木書店、1973、pp.191-193
3）佐藤学・佐伯胖編『学び合う共同体』東京大学出版会、1996、pp.89-95
4）同上（佐藤学･佐伯胖編『学び合う共同体』）、p.156
5）越門勝彦『省みることの哲学―ジャン・ナベール研究』東信堂、2007、pp.51-54
6）同上（越門勝彦『省みることの哲学―ジャン・ナベール研究』）、pp.59-64
7）小澤基弘「制作学的視点による美術教科専門

科目における統合内容学の研究」大学美術教育学会研究報告書、2010、p.5、p.19、p.23

8) 単位は未定

9) 冨金原光秀「パーソナルカラーをベースにしたヘアメイク理論についての考察」『小池学園研究紀要』第7号、2010

10) 佐藤学「リテラシーの概念とその再定義」、日本教育学会『教育学研究』第70巻第3号、2003、pp.292-301

11) ピエール・ブルデュー『実践感覚』1・2（今村仁司訳）みすず書房、1980、1988・1990年の序文　pp.1-35

参考文献

1) ジョン・デューイ『学校と社会』（宮原誠一訳）、岩波書店、1957

2) 冨金原光秀「パーソナルカラーをベースにしたヘアメイク理論についての考察」『小池学園研究紀要』第7号、2010

3) ニール・コックス『キュービズム』（田中正之訳）、岩波書店、2003

4) メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』（木田元訳）、みすず書房、1974

（東萌ビューティーカレッジ専任教員　冨金原光秀）